

ADVOCATE

Japanese Society of Health Promotion : JSHP

日本ヘルスプロモーション学会公式ホームページ <http://www.jsph.net/>

9

第9号

日本ヘルスプロモーション学会
2006年1月1日発行
発行者 島内憲夫
編集者 吉岡康

学会事務局
〒270-1695
千葉県印旛郡印旛村
平賀学園台 1-1
0476-98-1118 (tel/fax)
jimukyoku@jsph.net

* advocate「アドボケート」とは、ヘルスプロモーションに関するオタワ憲章の中に書かれている3つのプロセスの第一番目「唱道」のことで、

巻頭言

ヘルスプロモーションは万国普遍のまちづくり、幸せづくりの羅針盤
- 東北ブラジル健康なまちづくりプロジェクトの経験から思うこと -

常任理事 湯浅 資之 (国立国際医療センター / 現ブラジル在住)



昨年の暮れ、私はブラジルの東北地方の田舎町をまわりながら、町の市長らと「健康なまちづくり」について意見交換を行っていました。

「まちづくりの基本を人々の健康と生活の向上においてみてはいかがですか。」

「数多くある町の審議会や協議会を整理して、住民の声を反映でき、公共政策の連携を促せるような基幹となる委員会をつくってみてはいかがでしょう。」

その時ふと、ブラジル人とやり取りをしている自分に、10年前北海道の田舎町で全く同じような会話を交わしていた自分を見つけたのです。

現在、私は国際協力の一環で貧困にある東北ブラジルの地でヘルシーシティーズ (Healthy Cities) のプロジェクトに従事していますが、それ以前には北海道の保健所で管轄の市町村の保健師らと共に「健康なまちづくり」活動を展開していました。事業毎に設置されていた種々の審議会を「健康なまちづくり推進協議会」一本に整理し、住民参加を得てまちづくりの基本計画を立案していたのです。そこでの経験が、文化も社会経済の状況も全く異なるブラジルの地で、今活かされていることを実感しています。

カナダや欧州で生まれ育ったヘルスプロモーションは社会の成熟した先進国向けの健康戦略であると久しく考えられていた時もありました。しかし、私の拙い経験を振り返っても、ヘルスプロモーションが洋の東西を問わず、赤道の南北を問わず世界普遍的価値を有したものであると今では考えるようになりました。貧困と麻薬、熱帯病、売春、諦念の気持ち、人権軽視など健康や生活を蝕む状況が幾重にも折り重なっている中で、その日その日を必死に暮らしている東北ブラジルの人々にとって、自らの健康を考え、自分たちの力でこれを改善しようとするヘルスプロモーション的道程は、明日への希望を託せる唯一の道ではあるまいか。最近、私はますますそう確信するようになってきています。

2006年の新しい年を迎えました。今年はオタワ憲章が世に誕生して20年という節目の年に当たります。人間で言えば、若くしてハツラツと社会に巣立っていく年齢です。ヘルスプロモーションが世界のすべての人々のまちづくり、幸せづくりの羅針盤として、いよいよ本領を発揮する時期が到来したと言えるでしょう。

* 学会員の皆さまへ * * * 今年度年会費納入はお済みですか * * *

平成17年度の年会費納入がまだの方は至急払い込みをお願い申し上げます。(一般会員3000円、学生会員1000円、賛助会員一口10000円です。)円滑な学会運営のためにも、早めの納入にご協力をお願いいたします。

振込先: 郵便局: 00180-3-571047 日本ヘルスプロモーション学会
(払込用紙には「会員氏名」・「一般/学生/賛助会員の種別」を明記ください。)

なお、平成18年度の会費納入につきましては、平成18年4月1日以降に改めてご案内させていただきます。

特集

「第3回学術大会・総会」 (2005.11.20-21 於:北九州国際会議場)

去る11月20-21日、日本ヘルスプロモーション学会第3回学術大会・総会が、中村修一先生（九州歯科大学教授/本学会理事）大会長のもと、福岡県北九州市内の北九州国際会議場で行われ、全国から集った参加者たちが熱い思いを胸に、それぞれのヘルスプロモーションへの論議を交わしました。今回はその参加者の中から、筒井昭仁先生（福岡歯科大学）に充実した会の模様をレポートしていただきました。

ビールのある学会

筒井 昭仁（福岡歯科大学）

第3回ヘルスプロモーション学会は、大会長中村修一先生の「私のたつての希望でロビーにビールを用意しました」から始まった。

大会長講演「途上国におけるヘルスプロモーションの取り組み-ネパールでの歯科保健17年の経験から」では、1989年からの19回の長期にわたるミッションと、その中身、キュアからプライマリヘルスケア、そしてヘルスプロモーションへの変遷が報告された。まずは顕在化したニーズであった歯科治療から地域へ入り、その地域の中で、診療を通じて人々の歯科保健ニーズを把握し、事業計画を立て、事業を実行し、評価を行う Plan-Do-See を繰り返す中で、ミッションの中身は徐々に保健教育、予防活動、参加型の地域活動へと変化していったことが、必然的な出来事のように語られた。しかし、実際には、多くの異なった職種の参加者の体調管理からマネージメント、細々とした歯科医療器材を用意し、巨大な荷物と化したそれらを国境を越えて搬入する煩わしさなど、緻密な計画と資金集めなどの複雑なプロセスがあったことなども話のなかから伝わってきた。



大会長の中村先生

現在はヘルスプロモーションセンターを中心とした診療と近隣の複数の村での地域保健活動が並行して行われている様子が紹介された。その比重はというと、診療部門が資金、器材等の物的資源のほぼ70%、日本人スタッフの約60%を占め、その対象者は約800人であった。しかし資金、器材の30%、スタッフの40%で行っている地域歯科保健活動の対象者は7倍以上の約6000人になるという。キュアあり、プライマリヘルスケア、そしてヘルスプロモーションと、必要に応じて混在している現場の様子がリアルなスライドとともに語られた。



特別講演のために来日された国立台湾師範大学教授 鄭惠美先生からは、『台湾のヘルスプロモーション活動』が紹介された。

シンポジウム「セッティングズ・アプローチから見たヘルスプロモーション～順天堂大学ヘルスプロモーション・リサーチ・センターからのメッセージ～」

島内先生の話聞くのは久しぶりであった。テーマは「セッティングズ」。聞いていくうちに、これは氏が最初の頃から言っていた「健康はどこで創られるのか」であることがわかった。「病気-治療-回復=健康?」という閉ざされた病院の中での構図だけがセッティングとして、医療関係

者、人々にとっても当たり前のように認識されていた時代、「健康はどこで創られるのか」は大変に新鮮で強烈であったことが思い出される。はじめて島内先生からヘルスプロモーションの話聞いたとき、私にとって一番印象的だったのが5つの活動指針の中の「ヘルスサービスの方向転換（病気を治す 健康をつくる/病院中心 家族・地域社会中心/専門家 人々）」であった。同じ話は後に Green から聞いた。しかし、それから月日を経たが現状はどうであろう。医療関係者の多くは、いまだに複数形であるセッ

ティングズの S を認めたくないようである。



私の参加する NPO 法人ウェルビーイングは、診療室から出たところから始まった組織である。島内

先生を招いての勉強会以降、今になって振り返ると、人々の生活の場、あるいはライフステージにおける口を通じての健康づくりシステムをいかにつくりあげていかにエネルギーを注ぎ込めたか気がある。生活の場は、社会/経済にリンクしている。特に経済の変化はそれぞれの場における健康づくりに大きく影響していた。

最新情報としてバンコク憲章が紹介された。しかしそこには懐かしいキックブッシュの名前があった。ヘルスプロモーションは1986年の生みの親によってバージョンアップが続けられていた。定義も「ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康と、その決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである(2005)」となり、同時にセッティングズが、「人々の健康と well-being に影響する環境的・組織的・個人的要因の存在する、人々が日常生活を営んでいる(社会的文脈としての)場である」と整理されている。

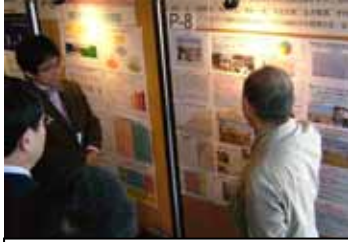
また、それぞれのセッティングにおけるステークホルダー（統括責任者）の存在意義が強調された。これについては健康の町づくりを具体的にすすめている千葉県における事例が会場からの発言として紹介された。

1日目の懇親会の夕べは、2日目のワークショップの面倒をみた中村譲治先生（NPO 法人ウェルビーイング常務理事）がフィルド（パイオリン）弾きとして活躍するターコイズのブルーグラス演奏とともに始まり、なぜか1次会からの



参加人数が減らないままの2次会、3次会へと小倉の街に流れていった。

2日目は、ポスターセッション、ラウンドテーブル



座長(写真:左)が筆者

前夜の勢いそのままの濃い20題のポスターセッションに始まり、午後には、ワークショップ「健康なまちづくりの現場からヘルスプロモーションを考える」が、セッティングズ・アプローチの6つの具体的な題材(家族、

学校、職場、地域、病院、街)ごとにラウンドテーブル形式で行われた。



私は守山正樹先生の「教育の視点からヘルスプロモーションを眺める」にファシリテーターとして参加した。ここでは守山先生発案のWify(What is important for you?)を通じて行った英会話教育が事例として提供された。英語がしゃべれないのではなく、話したい内容が未整備状態であることが問題だとする英国人教師の指摘から、他人とは違う“私”を素直に表現するWifyを使ったという話であった。最近、Wifyは様々な場で、思わず知らず自分を表現してしまっている自分に気づくための仕掛けとして利用されている。同時に、それを他と交換することによって、他と違う私の発見、私と違う他の発見が生まれ、社会が多様な

人で構成されていることにも気づかされる。そこで考える健康は、参加者の多様性を前提としており、従来と違った発想経路で、しかも参加型のヘルスプロモーションが起こりうるそれがラウンドテーブルで話題となった。



参加者の多くがWify使用経験者であり、語られる使用体験の多様性は驚くほどのものであった。

ラウンドテーブルは、1人の発表者とそれを聞きたい者が1つのテーブルを囲む演題発表形式である。時間もたっぷりとり、発表者から参加者へ向けての発表、質疑はもちろん、逆に参加者から発表者への情報提供や、参加者同士の意見交換なども起こる参加型の発表形式である。それぞれがなにがしかのおみやげを持ち帰ることができる参加者満足度の高い内容であった。これから日本でも各種の学会で盛んになりそうな気配である。

ロビーに小ビール缶。わたしも幾つかいただいた。ヘルスを語るにはフィール・グッドの心が大事である。この学会そのものもヘルスプロモーションのセッティングズの1つであった。



学会を終えて三々五々と皆さんそれぞれのセッティングに戻っていった。それぞれのセッティングでの活躍が期待される。

(筆者の学会参加の不徹底さから、学会全容の紹介ができませんでしたことをお詫びします)



たくちのりひさ 国際的エンターテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」(本拠地カナダ)に所属、「キダム」スキップینگ・ロープ(なわとび)ソロ出演、「キダム」日本人初のアーティスト。現在世界各国をツアー中。

通 章

NORIEのヘルスプロモーターリング・ツーリズム

(第4回)

会員 田口 師永

号が変わるときにはすでに次の街。しかし、すでにシンガポール公演も終了し、香港からのお便りを。シンガポールの街を歩いてみると、それまでのオーストラリアの街々では感じるものなかつた安心感がそこにある。人々の熱気、喧騒、すべてが混ざり合うような感覚。ああ、ここはアジアなのだ。だが暑い。高温多湿とはよく言ったものだ。ずっと続く夏。でもそれはやはり何がしかの懐かしさを含んでいる。シンガポールには四年前にも一度訪れている。しかし旅をすることとそこに住むということは、大いに違うのだ。現地の友人と多くを語る。一週間足らずの旅では何も見えてこなかったもの。六週間とはいえ住むことにより見えてくるもの。その違いが貴重な経験になっているのだ。それにしても食事が美味い。どうやら最近、美味しいものを食べることが自分の中で大きなウエイトを占めつつある。

新役員が決定

(任期：平成 18 - 20 年度)

選挙管理委員会 委員長 松岡正純氏(千葉県白井市役所)立会いのもと、平成 17 年 8 月 18 日に新評議員が、平成 17 年 9 月 26 日に新理事が選出されました。また、新理事の選出後、平成 17 年 10 月 15 日に第 1 回新理事会が開催され、会長選出の後に新常任理事が決まりました。

(以下、50 音順)

【一般評議員】

井口明彦	石井明子	石崎順子	市村久美子
蝦名玲子	遠藤圭子	大森道子	岡利実
岡田進一	尾形聡	笠井喜久雄	加藤優二
加藤由紀	川越博美	木村正人	久保勇人
黒田真理子	斎藤恭平	斎藤佐知子	笹井勉
佐々木健	佐藤京子	島内憲夫	助友裕子
鈴木秀子	砂川博史	宗宮安弘	高石純子
高村美奈子	田口師永	武見ゆかり	建野正毅
田山地麻里	妻木美香	藤内修二	徳田武
永山洋子	中村修一	中村譲治	成木弘子
西田美佐	白田千代子	林二士	深井穂博
藤原愛子	星野明子	松岡奈保子	松岡宏明
松岡正純	宮本照嗣	村上テイ	森川洋
森山良典	矢野裕子	山田順一	山本千華
山本春江	湯浅資之	湯田真喜雄	吉岡康
吉川菜穂子	脇谷のり子		

(以上 62 名)

【学生評議員】

植松祐美子	小山内泰代	鍵谷英明	田中誠二
馬場洋子	宮崎朋子	宮田乃有	八巻絢子
山中美子			

(以上 9 名)

【理事】

蝦名玲子	岡利実	尾形聡	笠井喜久雄
斎藤恭平	島内憲夫	助友裕子	高村美奈子
建野正毅	田山地麻里	藤内修二	徳田武
中村修一	西田美佐	松岡正純	山本春江
湯浅資之	吉岡康	吉川菜穂子	

(以上 19 名)

学生理事の選出はされなかった。
(投票のあった一通は、理事選出後の届けだったため無効票とした。)

【会長】

島内憲夫 (以上 1 名)

【副会長】

建野正毅 山本春江 (以上 2 名)

【常任理事】

岡利実	尾形聡	笠井喜久雄	斎藤恭平
助友裕子	高村美奈子	西田美佐	吉岡康

(以上 8 名)

トピックス

Vol.8

ヘルスプロモーション グロッサリー

15. 健康教育 (Health education): ヘルスリテラシー改善のためにデザインされたコミュニケーションをいくつか巻き込みながら学べる機会の設置を明確な守備範囲とする。知識の改善や、個人やコミュニティの健康に寄与するライフスキルの開発を含む。(WHO, 1998)

16. 健康の決定要因 (社会的決定要因) (Determinants of health/ Social determinants): 健康の決定要因とは、個人あるいは集団の健康状態を決定づける個人的、社会的、経済的、環境的要因のことである。(WHO, 1998)

グロッサリーに追加注文はありませんか
毎号ご紹介しているヘルスプロモーション・キーワード。「今はこんな単語を知らない時代遅れ!」「こんなのはどう?」などのご意見もお待ちしております。
jimukyoku@jshp.net

事務局よりお知らせ

事務局業務は下記の 2 箇所で行っています

当学会事務局【本部】は順天堂大学健康社会学研究室(島内研究室)にオフィスをかまえておりますが、同大学ヘルスプロモーション・リサーチ・センター(WHO 指定研究協力機関)ユウカリが丘支局(千葉県佐倉市)にも一部業務をお手伝いしていただいております。学会事務局【本部】は今までどおり運営しておりますが、万が一 TEL 等で留守の場合は、同オフィスでもご連絡を受け付けておりますので、お気軽にお問い合わせください。

順天堂大学健康社会学研究室【学会事務局本部】

0476(98)1118 (TEL/FAX)
(担当:高村)

順天堂大学ヘルスプロモーション・リサーチ・センター:ユウカリが丘支局の連絡先

043(489)9091
(担当:橋本・高村)

「会員の声」を募集しています!

身の回りの活動、日頃思うこと、ニューズレターに対するご意見、学会に対するご意見等、会員の皆さまからのご投稿をお待ちしております。

jimukyoku@jshp.net

編集後記 新年あけましておめでとうございます。2004 年の『災』から一転して『愛』の一字で締めくくられた 2005 年。さて、2006 年はどのような一年になるでしょうか。本誌を通じて会員の皆さま方と共に彩を添えられるような一年にしたいと願っております。本年もニューズレター-ADVOCATE をよろしくお願い申し上げます。(助友)

©本印刷物の無断転載を禁じます。